2019 年度　保育専門講座Ⅲ

映画上映会「あの日のオルガン」

2020 年２月４日（火）

【受講者アンケート】参加者：171 名（午後の部：56 名・夜間の部 115 名）
アンケート回収数：１０１枚（QR 活用報告含む）

①あなたの職種は何ですか。

施設長・園長	保育士・保育教諭	その他 （事務、栄養士、調理師、看護師）
１２名	８４名	５名

②今回の研修は、あなたの今後の働きにおいて役に立ちましたか。

・大変役に立った	４７名
・役に立った	４５名
・ふつう	８名
・役に立たなかった	０名
・全く役に立たなかった	０名
・無記入	１名

③今回のような研修を今後も期待しますか。

・大変期待する	３７名
・期待する	５４名
・ふつう	７名
・あまり期待しない	１名
・全く期待しない	０名
・無記入	２名

④今回の研修（上映会）をうけて感じたことは何ですか。

- “健康で文化的な生活”を送ることは簡単ではない。今、こうして不自由なく過ごせることに感謝したい。
- 現代を生きていく、今の保育に通ずるものをとても感じることができた。とても感動した。
- 子どもを第一に考えて行動することについて考えさせられた。時代に流されながらも保育にあたった人たちの勇気に感動した。
- 戦争のさなかの時代を生き抜いた人々の様子、どれほどの思いや体験をしたのか、若い世代の我々は想像もできない程だが、同じ保育士として誇りに思う。彼女らの大切に守り抜いた強さや子どもたちのように日々の保育にも生かし守っていきたい。
- 戦争時代の子どものたくましさ、支える保母達のリンとした姿に心うたれた。
- “戦争”ということがあり、親子が離れ離れにならないといけない状況の中、保育者は親代わりという立場で頑張っていた。おねしょも保育者がいることで安心感を与えていたと思う。
  保育者は第２の親として、子どもに安心感を与えていくことが必要だと思う。
- 疎開保育をするにあたって、とても責任があったと思う。今の時代、豊かさを感じた。
- 戦争の悲惨さ。その中で、子どもたちに何をしてあげられるかを考える力強さ。
- 自分の身を削ってまでも、子どもたちの命を守る姿に感動した。今回の研修で学んだことを生かしていきたい。
- 生きることが困難な戦時下、保育に向き合う保母たちの真剣さに感銘を受けた。
- 最後まで子どもたちを守り、戦争と戦う姿がとても心に染みた。
- いつの時代でも保育者は子どもを守ることを考えるのだなと思った。そして戦争が憎いとも思った。
- 不測の事態が起こった時に、保育者はどのように対応していくのか考えさせられた。子どもを守ると言っても保育者に強い信念がないと達成できないのではないかと。ただ、登場人物たちが自分達の弱さを吐露していたので、人間の素の姿を見られ、かえって救われた思いがした。
- 戦争のない時代に生きる事はとても幸せな事なのだと思った。子どもを預かるという事の責任感を改めて認識した映画だった。
- 今、私達たちは文化的な生活をしているのか、疎開先の保育は森の幼稚園に似ているように思う。
- 改めて命を守り、命を育てる仕事であることを思い、心が熱くなった。
- 命を守るということに感動。
- 保母という仕事のすばらしさを改めて考えさせられた。
- いつの時代も子どもたちのために生きる保護者、保母という仕事の尊さを改めて誇りに思った!!今を生きます!!
- いつの時代も、子どもたちを思う人たちのまなざしは同じだと思った。
- いつの時代も子どもを思う気持ちは変わらないだと感じた。今を生きる私達に必要なものを考えさせられた。
- もしも今こうしたことが起きた時、自分には何ができるのか、と深く考える機会となった。
- 子どもたちを守り抜く大切さ。
- 子どもを守るということの大変さ、大切さを学んだ。
- 子どもを大切にすることの大切さを改めて感じた。
- 子どもたちの大切さ。家族の大切さ。
- 子どものために動くことの大切さ

- 命の大切さ、愛情とはと考えさせられた。
- 命の大切さ、日々の感謝を忘れずに生きる事。
- 命を守ることの大切さを考えさせられた。
- 命を守る責任について考えた。
- 保育の中での子どもとの関わり方を見直していこうと思った。
- 子どもには未来があるからこそ、命だけでなく色々な気持ちも大切にしてあげたいと思った。
- 自分が保母の立場で子どもを守るために、あんな風に子どもと向き合えるか、改めて考えさせられた。
- 保育士として、自分にあそこまでできるか考えさせられた。独身だったらしているかなぁと思ったが、今は無理だと感じた。
- 自分も母であり色々と考えさせられる研修だった。今回のような研修にもっと参加したいと感じた。
- もっと子どもたちの未来のため、私たちは考え努力しなければいけないなと感じた。命と子ども達の大切さを改めて感じた。
- 子どもたちにとって、私たちはどうあるべきか、何をすることがいいのかを考えさせられた。
- 時代は違えども、子どもに寄り添う姿、子どもに責任を持つことを改めて考える機会となった。
- いつの時代も保育で大切なことは同じだと感じた。
- どんな時代でも、保育士の役割が大切であり、重要なのかを映画を通し学ぶことができた。
- 戦時中の保育の大変さ等を感じたが、子どもを守る意味では同じだと感じた。
- いつの時代であっても、心で繋がる事のできる愛が何よりも大切であると感じた。
- 考え方や子どもへの接し方が違う先生たちをまとめていくことは、今も昔も大変な事だと思った。
- 今、子どものために最善を尽くしているつもりでも、それが本当に間違っていないのか、正解なのかは、目の前にいる子どもたちが大人になった時にしか分からない。重さは違っても現代にも当てはまる事だと感じた。親としても、保育士としても、気が引き締まる内容だった。
  是非たくさんの保育士、子育て世代の方に見て頂きたい。
- 今も、戦争当時も、子どもたちを守りたいと思う気持ちは同じだと思うが、この疎開保育園のように、全てを子どもたちに捧げるほどの保育を、できるだろうか。ただ、愛情は注げる。
  命の大切さを感じ、保母と名付けられていたように、保育園での母となって、様々な状況における子どもたちを守り、保育にあたりたいと感じた。
- 私たちの役割
- 保育士としての使命
- 文化的な生活について、子どもにとって良い関わりについて考えさせられた。
- 文化的教育ということばが心に残った。正しいか間違っているか、戦争の頃も今も変わらないと思った。
- ノンフィクションが知れて良かった。愛他の心を持った保育士は凄いと思った。
- 今でも活きることだと思った。
- 戦争というものと向き合って生きていかなければいけない時代というのは今とは全く違うので、保護者が亡くなった時、私ならどのように伝えるのかなと考えさせられた。
- 昔から子どもたちのためにと生きた保育士の方がいたことを知り大変だったろうなと思ったのが、一番だった。昔より恵まれた今の時代、しっかりと子どもと向き合い、子どものためにと関わっていきたいと思った。
- とても良い映画だった。保育士の大切さ、すばらしさを感じた。

・感動で言葉にできません。皆が一生懸命に生きていて、保育のあり方を知った。
・涙が止まりませんでした。幸せな時代に生まれたことをかみしめながら。
・このような映画があることを知らなかったのですが、この機会に見ることができて良かった。涙が止まりませんでした。
・「自分たちがやっていることは正しいことなのか、本当に子どもとその家族のためになるのか」この問いは戦争中だけでなく、平常時においても保育者が常に考えていなければならないだろう。
・子どもの命と笑顔を守る仕事は大変だけど何かを得る仕事だと感じた。その何かは、これから気が付いていくのでしょうね。
・色々な見方があって感じることが多かった。
・少し重かったかな。
・戦争という特別な時代背景の中で、保育者の責任感や使命などは伝わってくるものがあったが、重い内容だった。
・日々仕事ですり減らされる中、少しまた前向きな気持ちになれた。
・小さなことで悩んでいたことが、バカらしくなった。
・映画を見る研修は初めてだったが、とても興味深かった。子どもの大切さを改めて感じた。
・映像個の研修は見やすく、集中できた。
・保育の知識や技術ではなく、純粋な情熱。本来あるべき姿に感銘した。今の保育士みんなに観てほしいと強く思った。
・どの時代も子どもには健康で文化的な環境が必要ということ。
・現在の保育とは余りにも時代や状況に隔たりがあった。
・いつも楽しく参加させていただいています。

※とにかく寒かった。暖房を入れてほしかった。

⑤今後の研修について、ご希望の講師や内容がありましたらお聞かせください。

・毎年、１回は上映会があっても良いのでは
・今回のような、実話を元にして、考えたり、感じたりできる研修。
・忙しい日々に追われている保育を見直す内容
・子どもの遊び（わらべうた等）に関する研修
・感染症ガイドラインについての研修
・震災の記録、証言をまとめた DVD も危機管理の研修

※今回のような研修なら、保護者にも見てもらいたいと思った。
※とても良い内容ですが、平日の６時半では参加が難しいです。
せめて７時からならばもう少し多くの参加ができるかもしれません。